

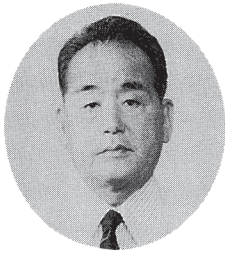
(Japanese Academy of Learning Disabilities)

## 日本LD研究会会報

第7号



事務局：長瀬総合療育研究所内 〒164 東京都中野区東中野5-5-10 R.H.S2F  
TEL&FAX. 03-3360-1855



## LDと神経心理学

聖和大学・大学院教授

隠岐忠彦

最近、心理学研究が様変わりし始めた。勿論、心理学のメインの対象は心の働きには違いないが、情報がどう受容され、どういうふう処理され、どのような行動として現れるか、などについてシステマチックに検討していくために、脳のメカニズムは無視できなくなってきたのである。

つまり、脳の画像診断（X線CT、MRIやSPECT、PET）、およびEEG技術の驚異的進歩につれ、情報処理機構としての脳のメカニズムと高次精神機能の関連性が、次々に明らかにされ心理学の研究に大きな影響をおよぼしたわけである。

その1つが神経心理学である。これは1960年代から、それまでの大脳病理学が脳科学の進歩により、衣替えしてきたものである。とくに失語・失認・失行などで脳と心の実態が明らかにされるにつれ、LD児がみせる臨床特徴を神経心理学的観点からアプローチしよう、という動きも1980年代末ごろにおこってきた。

しかし、子どもの脳自身が発達過程にあり、機

構的に未分化であること、また、それゆえ、かえって大人以上に脳損傷の回復力、機能の補完性が働くため、そう簡単に子どもの脳と心の関係について、結論づけられるものではない。

とはいうものの、この努力が、LD児の個別に対応した治療教育プログラムにとり、画期的なものになることは否めない。これまでの十把一からげ式のやり方が大きく改善され、効果を上げることは確かである。

たとえば、臨床検査から可能な限りの手法で言語性、非言語性のタイプのLD児を抽出し、それぞれの認知水準をロ・テストを通して検討してみると、その認知水準はMRや幼児よりさらに低い。しかも、言語性は認知したものをどう言語化してよいか失敗し、非言語性はインクプロットの認知そのものが極度に悪い、などの知見がLDタイプによる治療教育の方向性を示唆する。

ともあれ、神経心理学の立場からLDの多様性について再検討することは、治療教育の前進につながろう。